解剖誌　80：41-47（2005）

寄　書

我国の大学医学部・歯学部における解剖学教育に関する調査研究

片岡　勝子[1]，小林　繁[2]，佐藤　哲二[3]，曽爾　彊[4]，塩田　清二[5]，鳥越　甲順[6]，
松村　譲兒[7]，久野　節二[8]，安田　佳子[9]，洲崎　悦子[1]

[1]広島大学大学院医歯薬学総合研究科創生医科学専攻探索医科学講座組織学細胞生物学
[2]九州歯科大学口腔解剖学第一講座
[3]鶴見大学歯学部解剖学第二講座
[4]名古屋市立大学大学院医学研究科生体機能・構造医学専攻機能形態医学講座制御形態学
[5]昭和大学医学部解剖学第一講座
[6]東海大学医学部生体構造機能系形態学部門
[7]杏林大学医学部解剖学第一講座
[8]筑波大学基礎医学系解剖学第一研究部門
[9]近畿大学医学部解剖学第一講座

（2005年３月７日受付，2005年３月24日受理）

要　約：医学部・歯学部における解剖学教育の現状と解剖学教授の意見をアンケート調査した．解剖学教育は２年生を中心に行われている．医学部ではマクロ・ミクロを分けた授業が多く，半数で臨床解剖学が導入されている．チュートリアルは80％の医学部で導入されているものの，解剖学への導入は30％にすぎない．チュートリアル担当者は非担当者よりも，その効果を認めている．一方，歯学部ではマクロとミクロの統合が多い．臨床解剖学は35％で導入されているが，チュートリアルの導入は少ない．コアカリキュラムや共用試験に関しては，短所はあるものの必要性を認めている．ほとんどの教員は学生による授業評価を受けており，授業を改善するために役立つが，設問や実施時期を慎重に吟味すべきであり，授業改善以外の目的に直接に利用するべきではないと考えている．

これらの結果を踏まえ，解剖学教育のさらなる改善に資するための提言を行った．

Key words：解剖学教育，チュートリアル，コアカリキュラム，共用試験，授業評価

はじめに

我国の医学・歯学教育は変革期にある．平成13年３月には「21世紀における医学・歯学教育の改善方策について（学部教育の再構築のために）」[1]，「医学教育モデル・コア・カリキュラム（教育内容ガイドライン）」[2] 及び「歯学教育モデル・コア・カリキュラム（教育内容ガイドライン）」[3] が公表され，全国的に統一された指針が示された．このなかでは従来のような講義形式のみに頼ることなく，少人数の学生グループで行うチュートリアル教育によって，学生は主として自学・自習により知識を見つけ，身につけることが推奨されている．また，臨床実習開始前の全国共用試験（Computer-Based Testing，CBT）が平成18年からの本格実施にむけて試行されている．そして臨床実習の増加したことと相俟って，解剖学は大幅な教育時間の圧縮を要求されている．今回，日本解剖学会教育委員を中心に組織された科学研究費基盤研究（C）（1）「新しい医学教育における解剖学教育に関する調査研究」グループは，このような医学・歯学教育の変革期における解剖学教育の現状を把握，問題点を抽出し，これからの解剖学教育改善の方向性を提言しようという目的で，全国の医学・歯学の解剖学教授にアンケート調査を行った．

アンケートA（機関アンケート）は，81の医学部（医学科）のうち61から（回収率75％），29の歯学部（歯学科）のうち20から（回収率69％）返送された．アンケートB（個人アンケート）は，165人の医学部（医学科）教授のうち107人から（回収率65％），58人の歯学部（歯学科）教授のうち36人から（回収率62％）返送された．アンケート結果の集計の要約と，それをもとに解剖学教育委員会で討議し，纏めた提言を以下に述べる．

なお，アンケート結果の詳しい報告は「解剖学教育に関する調査研究　2004．コアカリキュラム・共用試験の導入と解剖学教育についてのアンケート集計結果について」[4] をご覧いただきたい．

解剖学教育の理念

解剖学は「人体という，過去・現在・未来に渡って不変である構造物を機能を考慮に入れて解き明かす学問」である．実物に学び，実物を正確に読み取る能力と習慣を身につけ，人体構造について考え表現するための素材となる正確な概念を身につけるという，医学・歯学を学ぶための基礎中の基礎となる学問である．そして，人体のどの部分をも欠くことなく，系統的に解剖する（決して「解体」であってはならな

連絡先：片岡　勝子　〒734-8551 広島市南区霞一丁目2-3
広島大学大学院医歯薬学総合研究科探索医科学講座組織学細胞生物学研究室